

海洋プラスチック汚染

現場からの報告

①



JEAN事務局長
小島 あずさ

JEANは、海洋ごみ問題に特化して活動している小さなNGOです。1990年に始まったJEANの活動で知り得た海のごみの現状や、現場から見えてくる課題などについてお伝えします。

収の経路から逸れて散乱するごみや、川や海に流入するごみも増えています。そして今では海に漂着するごみの大半がプラスチック製品とその破片という状況になり、海洋ごみとしての問題は深刻なものとなりました。

また、軽くて運搬に便利なプラスチックが散乱しごみになると、雨や風で簡単に移動します。雨水と共に水路に入ったり、風で飛んだプラスチックごみが川に落下したり、プラスチックごみは、川を流れ下り、やがて海へと到達します。

分解しない大量のプラスチックごみは、景観を汚すだけでなく、生態系に大きな影響を与えています。ウミガメやイルカ・クジラ、アザラシやオットセイなどの海洋生物に、漂流する漁網やロープ、プラスチック袋などが絡まってしまふことがあります。最近注目を集めた、プラスチック製ストローの廃止のきっかけの一つとなったのは、ストローが鼻に深く刺さったウミガメの映像でした。

しかし、プラスチックごみが生物に引っかかりたり絡まったりする被害については、1960年

代にすでに研究者からの報告がでています。漂流ごみをエサと間違えて生物が摂取してしまう誤食の被害についても、同じく60年代にハワイのコアホウドリや、静岡県の大井町の事例報告があり、研究者は警鐘を鳴らしていました。残念ながら当時の生物の研究者からの警告は、社会全体に広がることはなく、問題は見過ごされてしまいました。

ICCCは、ごみを拾ってその場所をきれいにするだけではなく、集めたごみのデータをとり、それを世界中で共有してどんなものがどれくらいあるのか、それらのごみを元から断つにはどうすれば良いのかを考え、実現していくための活動です。17年には107の国と地域から約80万人のボランティアが参加しました。

海のごみ問題は、古くからある問題だと言われている。人の生活や産業の場からごみが出るのは昔からあったことです。でも現代では、ごみの量や材質が大きく変わりました。

石油を原料にした合成樹脂が誕生したのは1907年のこと。以来、技術開発がどんどん進み、1960年代からは使い捨てのプラスチック製品が續々と誕生しました。

その結果、ごみの量は増え続けました。使い捨てごみの増加に伴って、回収の経路から逸れて散乱するごみや、川や海に流入するごみも増えています。そして今では海に漂着するごみの大半がプラスチック製品とその破片という状況になり、海洋ごみとしての問題は深刻なものとなりました。

さまざまな形に加工でき、安価な日用品にもたくさん使われているプラスチック。使うときは便利ですが、安いものは大事にされません。修理して使うよりも、傷んだらすぐ捨て、新しい物を買えば良い、となってしまうがちです。こうして一度使っただけでごみになるものが増え、海に流



栄養ドリンクの口金を貝殻の代わりに背負っているヤドカリ (沖縄県で撮影)

ごみを細かく分け、個数で数えて記録するのはとても手間のかかる作業ですが、調査への参加を通じて、海のごみの多くがプラスチック製であることや、破片ごみが大変多く、拾いきれないほどの数量であることなどを参加者が気づきつつあるのを見ています。次回は日本での調査結果や、各地の漂着ごみの実態などをお伝えします。

60年代に生態影響が報告 問題は見過ごされた